国語科におけるポートフォリオ評価の活用
～児童の自己評価能力の育成を目指して～

山口市立大殿小学校
教諭　内山　公介

Ⅰ. 問題と目的

ポートフォリオ評価は、日本においては総合的な学習の時間の導入を契機として、2000 年代前半に広まった。現在でも、総合的な学習の時間に使った資料やメモなどをファイルに綴る活動は多く行われている。また、「キャリア・パスポート」の実践も増えてきており、ポートフォリオ評価は学校現場に定着している評価法の 1 つと言える。しかし、その活用については課題も指摘できる。

第 1 に、ポートフォリオ評価が各教科の学習にほとんど活用されていないという実態がある。ポートフォリオ評価は、「ポートフォリオづくりを通して、子どもの学習に対する自己評価を促すとともに、教師も子どもの学習活動と自らの教育活動を評価するアプローチである」[i)]とされている。このことからもわかるように、ポートフォリオ評価は自己評価を促すことをおもな目的の 1 つとしており、諸外国では各教科の学習においても用いられている。しかし、日本ではそのほとんどが総合的な学習の時間における活用であり、各教科での活用事例が少ない。

第 2 に、ポートフォリオ評価を行うときに、資料などをファイルに綴るだけで終わってしまうという課題が挙げられる。もちろん資料をファイルに綴ることはポートフォリオづくりの一部ではある。しかし、綴るだけで終わっていたり、綴ってさえいればポートフォリオ評価をしていることになると教師が思い込んでいたりするとすれば問題である。ポートフォリオが単なるファイルにとどまらないようにするためには、集めた資料を生かして自己評価を促すような活動が必要だ。

以上 2 点の課題を踏まえて、本稿では国語科におけるポートフォリオ評価の活用事例を紹介したい。具体的には、単元の概要やどのようなものをファイルに綴ったのかを紹介するとともに、ポートフォリオ評価のポイントでもある自己評価を促すために、どのような活動を取り入れたのかを示したい。

Ⅱ. 国語科におけるポートフォリオ評価の活用事例

(1) 学年・教科

第 4 学年・国語科

(2) 単元名

対話を通して『ごんぎつね』の世界をつくろう　～自分だけの『ごんぎつね』小冊子づくり～

(3) 単元の概要

単元の学習は以下のような流れで進めた。

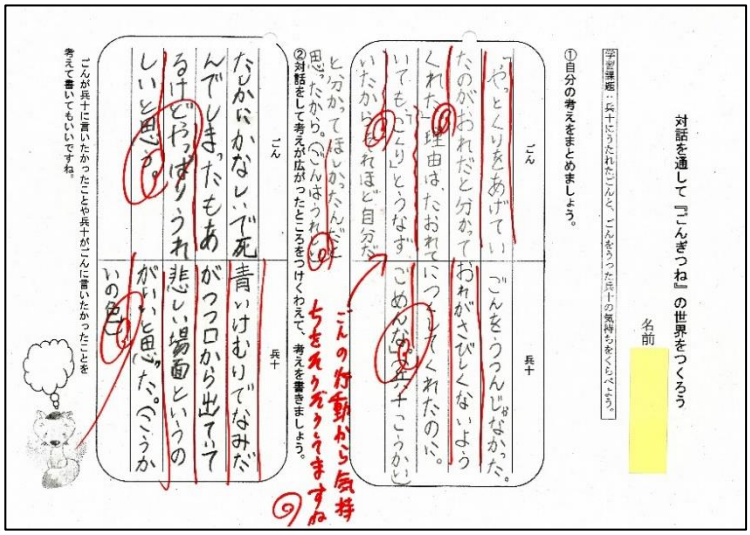
1. クラス全体で話し合う学習課題を作る（学習課題は以下の 6 つになった）

①「ごん」はどんなきつねかについて、考えたことを聞き合いましょう。
②「兵十」はどんな人物かについて、考えたことを聞き合いましょう。
③つぐないをするごんについて、考えたことを聞き合いましょう。
④五場面(兵十と加助のあとをつけていく場面)のごんについて考えたことを聞き合いましょう。
⑤兵十にうたれたごんと、ごんをうった兵十の気持ちをくらべよう。
⑥『ごんぎつね』という題名について考えたことを聞き合いましょう。

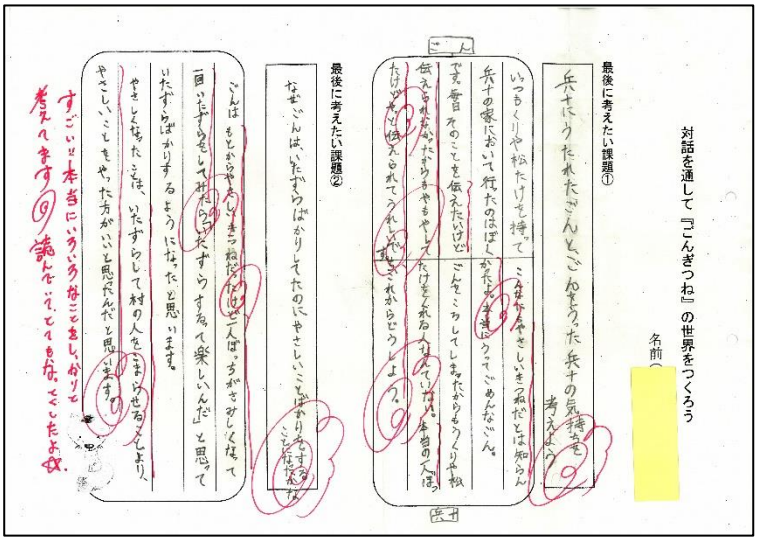
2. 作った学習課題について話し合う
3. 最終課題に取り組む(最終課題について詳細は後述する)
4. 最終課題の記述を相互に読み合う
5. 「あとがき」「はじめに」「表紙」を作る

「2. 作った学習課題について話し合う」では、児童が作った学習課題を毎時間 1 つずつ取り上げた。それぞれの授業は、「自分の考えを書く→グループやクラス全体で話し合う→話し合いを踏まえて自分の考えをもう一度書く」という流れで進めた。そして、毎時間の授業で使用したワークシート(資料 1)はファイルに綴るようにさせた。

①から⑥のすべての学習課題について話し合った後、児童に「最終課題」に取り組ませた(資料 2)。これは、最後にもう一度考えてみたい学習課題を自分で 2 つ設定して考えを記述するという課題である。学習課題はそれまでの授業で扱った課題でも、新たに自分で設定してもよいこととした。なお、最終課題については成績づけ(評定)に反映させた。



資料 1　授業で使用したワークシート



資料 2　最終課題

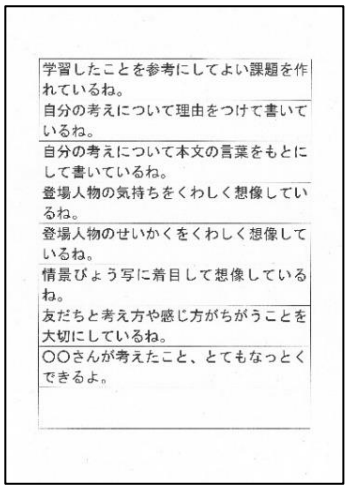
その後の授業では、最終課題の記述をお互いに読み合い、相互評価する時間を設けた。読み合うときには、評価の観点が明確になるように、資料 3 のようなカードを用意した。3、4 人のグループで互いに最終課題の記述を読み合い、カードに書かれている文言が当てはまると思った友だちに渡すようにした。これらの学習でファイルには以下のものが蓄積された。

・ワークシート(学習課題ごとに 6 枚ある)
・最終課題(裏面に友だちからもらった相互評価のカードが貼られている)
・ごんの住んでいるところを絵地図に表したもの・言葉の意味調べシート(左の 2 つは宿題で扱った)

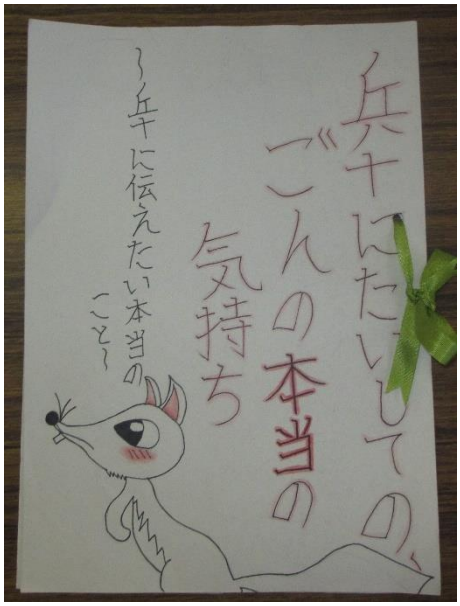
(4)児童の自己評価を促す活動　～「あとがき」「はじめに」「表紙」を作る～

本実践では、ポートフォリオ評価の本来の特徴である、自己評価を促すことを重視し、児童が学習の成果や課題を把握できるようにするための活動を取り入れた。具体的には、綴ってきたものを 1 つにまとめて小冊子(資料 4)を作ることとし、そのなかで「あとがき」「はじめに」「表紙」を作成するという活動を行った。

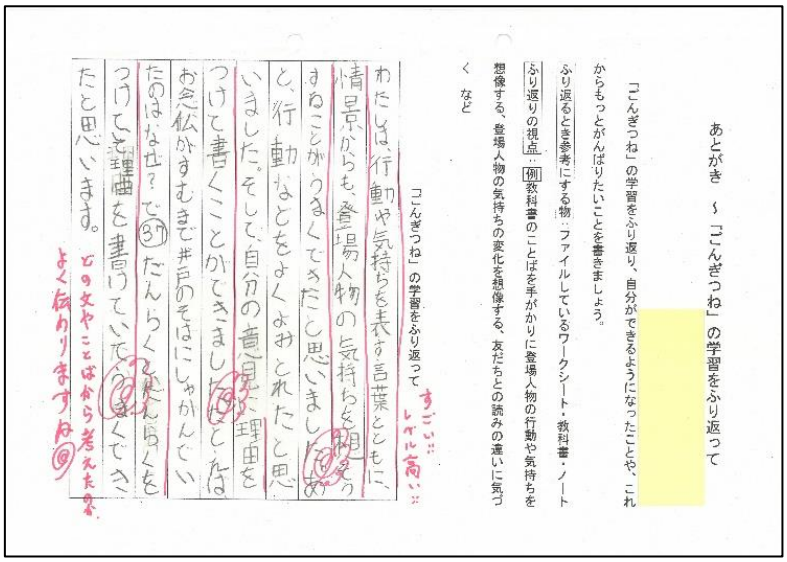
「あとがき」には、単元の学習をふり返り、自分ができるようになったと思うことやこれからもっと頑張りたいことを自由記述させた。書くときには、漠然とした感想にならないように、資料 5 にあるような「ふり返るときに参考にする物」と「ふり返りの視点」を示した。「あとがき」には、つぎのようなことが記されていた(資料 5 参照)。


学習したことを参考にしてよい課題を作れているね。
自分の考えについて理由をつけて書いているね。
自分の考えについて本文の言葉をもとにして書いているね。
登場人物の気持ちをくわしく想像しているね。
登場人物のせいかくをくわしく想像しているね。
情景びょう写に着目して想像しているね。
友だちと考え方や感じ方がちがうことを大切にしているね。
〇〇さんが考えたこと、とてもなっとくできるよ。

資料 3　相互評価の観点カード



資料 4　完成した小冊子の例


あとがき　～「ごんぎつね」の学習をふり返って

「ごんぎつね」の学習をふり返り、自分ができるようになったことや、これからもっとがんばりたいことを書きましょう。

ふり返るとき参考にする物：ファイルしているワークシート・教科書・ノート

ふり返りの視点：例 教科書のことばを手がかりに登場人物の行動や気持ちを想像する、登場人物の気持ちの変化を想像する、友だちとの読みの違いに気づく　など

「ごんぎつね」の学習をふり返って

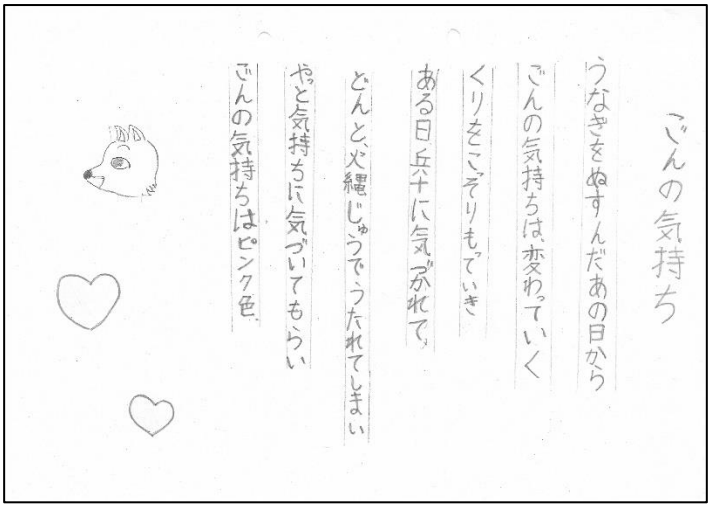
わたしは、行動や気持ちを表す言葉とともに、情景からも、登場人物の気持ちを想ぞうすることがうまくできたと思いました。あと、行動などをよくよみとれたと思いました。そして、自分の意見に理由をつけて書くことができました。たとえばお念仏がすむまで井戸のそばにしゃがんでいたのはなぜ？で37だんらくをつけて理由を書けていたのがうまくできたと思います。

どの文やことばから考えたのかよく伝わりますね

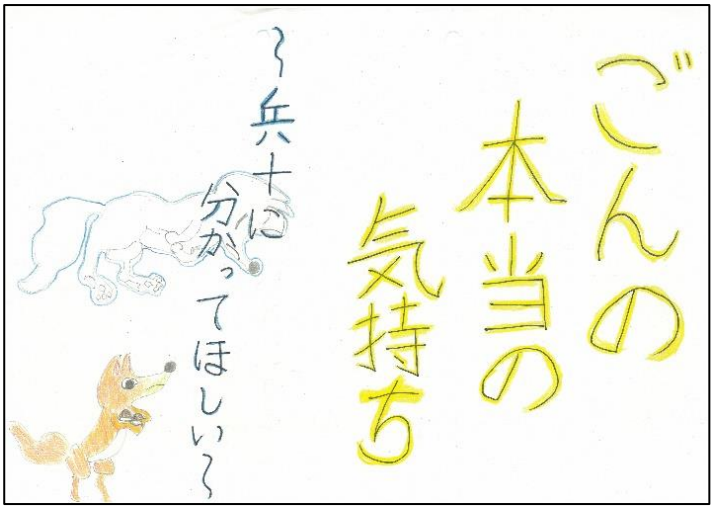
資料 5　「あとがき」の例

資料 5 の児童の「情景からも、登場人物の気持ちを想ぞうすることがうまくできた」のように、「読みの方法」の視点から自身のできるようになったことを記述している児童が比較的多く見られた。これは、「ふり返りの視点」に「登場人物の気持ちの変化を想像する」のように「読みの方法」に関する例を出していたことが影響したと考えられる。この他には、「学習課題を自分たちでかけるようになったから、これからも自分たちで考えていきたいです。コツは、場面を読みくらべて考えることです」というように学習課題づくりの視点からや、「班の人といっしょにたくさん意見を出し合って、ごんぎつねの物語の世界を自分たちで広げていく力が身についたと思います」というようにグループや全体での話し合いという視点から記述している例も見られた。

「はじめに」には、本単元で学習したテーマについて短い詩を書いてまとめたり、印象に残った場面の一部分を書き写したりするようにさせた。たとえば、以下のような詩が書かれていた(資料 6)。「表紙」には、自分の小冊子に題名をつけるとしたらどうなるかと問いかけて言葉を考えさせた。資料 7 のような自分なりの題名がたくさん生まれた。「はじめに」や「表紙」には、『ごんぎつね』という作品をどのように読んだのか、一人ひとりの読みの深まりやこだわりが表れているように感じられた。



資料 6　「はじめに」の例



資料 7　「表紙」の例

Ⅲ. まとめと今後の課題

本稿では、国語科におけるポートフォリオ評価の活用について具体例を挙げながら示した。小冊子の「あとがき」「はじめに」「表紙」を作るという文脈で自己評価を促す活動を取り入れたことは、児童に学習活動に必要感を感じさせながら、単元の学習をふり返る機会を保障するものであった。このような自己評価の機会を継続して取り入れることで、児童の自己評価能力の育成が促されると考えられる。

本学級の児童はその後の文学的な文章を教材文とした単元においても、資料をファイルしたり、自身の学習過程をふり返って自己評価したりする活動に継続して取り組んでいる。今後はこれらの資料も含めて整理する活動に取り組み、児童がより長期的な視点から自身に身についた力や今後の課題を把握する機会を設けたいと考えている。

Ⅳ. 注

i) 西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法～新たな評価基準の創出に向けて～』図書文化社、2003 年、52 頁。

Ⅴ. 主要引用・参考文献

1. 宮本浩子・西岡加名恵・世羅博昭『総合と教科の確かな学力を育むポートフォリオ評価法　実践編』日本標準、2004 年。
2. 西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法～新たな評価基準の創出に向けて～』図書文化社、2003 年。